

# 津市の文化財めぐり

18. 3. 15～16

齋木 敏夫

津駅に 10 時 40 分、22 名が集合し、ホテルに荷物を預け、近くにある蓮光院へ行った。

## 蓮光院 初馬寺 真言宗 御室派

614 年聖徳太子が自ら刻んだ馬頭観世音菩薩を祀ったのが始まりという古刹で江戸時代には津藩藤堂家の祈願所であった。住職の案内で本堂に上がり、本尊の馬頭観音像を拝んだ。その後収蔵庫を開けてもらい阿弥陀如来坐像(重文)を拝観した。寄木造で来迎印を結ぶ定朝様の平安末頃の像だ。木造大日如来坐像(重文)は東博に出陳されており、写真だけであった。東博で見た印象は平安初期の像で智拳印を結んだ金剛界の大日如来、均整もよくとれており、端正で姿勢の良さを感じた。

境内を出て少し歩いた。

## 四天王寺 曹洞宗

こちらも聖徳太子が建立と伝えられる古刹。境内から奈良時代の古瓦が出土され、平安時代にはこの地方で最も繁栄した寺院であった。1619 年藤堂高虎が改築、二代目高次が 1637 年に寺領を寄進したことにより、往年の輝きを取り戻した。まず鐘楼と芭蕉の文塚を見て、1646 年再建 切妻造、本瓦葺、四脚門形式の山門(市指定)をくぐり、本堂に上がり、本尊の釈迦如来像を拝んだ。住職の説明を聞いた後、右脇壇にある平安中期の檜の割知造(ワギヅクリ)の薬師如来坐像(重文)を拝観した。左脇壇には珍しい三面大黒天像がある。辯才天と毘沙門天が一体となった像で織田信長も祈願したそうだ。隣の部屋で接待のお菓子とお茶をいただき、聖徳太子像孝養像(重文)と藤堂高虎、同夫人像(重文)のレプリカを見て本堂を出た。墓地の一角にある花屋寿栄禅尼 織田信長生母の墓である五輪塔を見た。彼女は本能寺の変のあと信長の弟である信包(ブカネ)をたよって津に移り、この地で亡くなったそうだ。門前からタクシーに分乗し、津センターパレスへ行った。

## 津センターパレス

地下 1 階に津城の 100 分の 1 で制作された復元模型が展示されており、それを見た。藤堂高虎の石垣は直線的で加藤清正の扇の勾配と対比される。伊賀上野城の高石垣は高さ 30m もあり、見事なものだ。「犬走り」は石垣と堀の間にある一間から二間幅のスペースのことで石垣・土塁の崩落を防ぐ為であり、堀の掘削と同時並行的に行われる事から効率的と云われている。敵に侵入の足掛かりを与えてしまうなど、防御の面からは決して有利とはいえない構造だが石垣の崩落を防ぐ意味でも必要な構造のようだ。交差点に出て少し歩くと昼食場所だ。

## 昼食 東洋軒

城跡近くにあり、創業は明治 22 年の老舗。大正時代に建てた百五銀行上野市支店を移築した店内はクラシカルで古き良き時代を思わせる。二階の会議室であったと思われる部屋で洋風幕の内弁当をいただいた。松阪肉やエビフライなどがあり、ビールを飲みながら美味しくいただいた。

## 津城跡(県史跡)

東洋軒を出るとすぐに復元された丑寅櫓が見える。

津城を築いたのは織田信包で1580年にほぼ城は完成した。1595年に秀吉の家臣である富田信高が5万5千石で津城主となったが1600年の関ヶ原の戦いの前哨戦といわれる安濃津城の戦いで毛利秀元、安国寺恵瓊等に攻められ落城した。関ヶ原の合戦の後富田信高は再び津城主に返り咲き、灰燼と化した津城の復興に力を注いだ。1608年富田信高が伊予宇和島に移封され、替わって伊予今治から藤堂高虎が伊賀伊勢22万石の藩主として津城に入城してきた。高虎は豊臣方との合戦を予想して城の大改造を行った。本丸の北側を広げて石垣を高くし、両端に三層の櫓を新築し、内堀・外堀を整備した。しかし本丸の天守閣は再建しなかった。津が栄えるようになったのはお伊勢参りのお陰だと言われている。その仕掛けを作ったのが藤堂高虎なのだ。高虎が城の改修とともに精力的に町造りを始めた。まず城の北・西・南方に武家屋敷を作る一方、町人地・寺社地を東方に置き、城の東に堀川を切り開いた。そのとき高虎はお伊勢参りで賑わう伊勢街道に目をつけ、海岸近くに通っていた街道を城下町へと引き込み、人の流れを呼び寄せようとした。その為津は宿場町としても伊勢神宮に詣でる人でも大いに賑わった。それが「津は伊勢でもつ」と謡われるようになった由縁だ。城跡を市役所方向に歩き、藩校有造館の門を移築した入徳門を見て、外へ出た。

市役所前からタクシーに乗り、浄明院に向かった。

#### 浄明院 臨濟宗

1706年3代藩主・藤堂高久が自分の母の浄明院の菩提を弔うために建立した寺で江戸川乱歩の実家、平井家の菩提寺でもある。境内に入ると大きな五輪塔が目についた。これが高久の母浄明院の墓石だ。その近くに江戸川乱歩の実家、平井家の墓地がある。宝篋印塔(県指定)は1318年造で隅飾りがほぼ直角であり、古さを示している。格狭間(コウガマ)は一つで大きい。関東の二間と対比でき、違いが分かる。鐘楼(市指定)を見てタクシーに戻った。

#### 津観音寺 真言宗

東京の浅草観音、名古屋の大須観音と並ぶ日本三大観音の一つ。阿弥陀如来は国府阿弥陀(コウアミダ)と呼ばれ、天照大神の本地仏とされている。そのため伊勢神宮に参拝して津観音の「阿弥陀に参らねば片参宮」と言われた。創建は709年といわれる。1498年の大地震で現在の地に移転した。江戸時代以降は伊勢街道が門前を通り、伊勢参りの客の往来もあり、城下町・宿場町の中心寺院として賑わった。空襲により、多くの文化財が失われた。津城の鬼門の方向にあり、高虎をはじめ歴代の藩主から庇護を受けた。本堂の前にある銅灯籠(市指定)は1628年に高虎が寄進したものだ。仁王門をくぐり、銅灯籠、小津安二郎記念碑等を見て資料館に入った。戦時中疎開させていたため多くの絹本著色の絵画が残されおり、県指定となっているものが多い。愛染明王像、十二天像、虚空蔵菩薩像、大威徳明王像等を興味深く見た。大威徳明王像は水牛に乗っている像が殆どだがこの絵は水牛の横に立っている。資料館を出て本堂に入り、本尊の聖観音立像お前立にお参りして国府阿弥陀を拝観し、お堂から出た。平成13年再建の五重塔を見て境内を出た。

本日の予定が終わり、市内を散策してホテルに戻った。少憩の後 すぐ近くの「たわわ」で夕食となった。

## 夕食「たわわ」

ビール、酒、焼酎、柚子ソーダ等各自好みの飲み物を頼み、最長老の那須さんの乾杯の発声で食事が始まった。箸置きが「煮干し」であるのには驚いた。刺身やなべ物等を食べ、飲み、語らい楽しい夕食であった。

## ドーミーイン

夕食後部屋に戻り、奈良の銘酒「春鹿の大辛口」とビールで二次会となった。初日はお天気も良く、スムーズに行程が進み良かった。

## 二日目

大浴場の温泉に浸かり、ヴァイキングの朝食を食べた。朝から雨模様で寒い、タクシーを頼んだが行事があるせいで予約を断られた。止むを得ず駅前まで行き、タクシー乗り場に並んだがなかなか来ないため行動が共にできない。時間がかかったがようやく全員がそろった。

## 勝久寺 天台真盛宗

14世紀ころ創建、平安時代に創建された光耀寺が衰退し、仏像が当寺に移された。不便な所にある小さな寺だが重文の仏像が三体ある。早速お堂に上がると老住職が歓待してくれた。まず本尊阿弥陀如来坐像（重文）を拝んだ。通常仏像の写真撮影は難しいが住職は撮影許可だけでなく自らライトを照らし、よく見えるようにしていただき、三体とも写真に収めた。まず聖観音立像（重文）を拝観、平安時代後期の作 像高 85.1 cm、檜の寄木造で内刳りを施し、眼は彫眼、慈覚大師が光耀寺の本尊として安置したがその後勝久寺に伝来したと伝える。すらりとしたお姿で臍の辺りの法輪から二手に下がる瓔珞(ヨウラク)が印象的であった。次に地藏菩薩立像（重文）を拝観、平安時代末頃の作、像高 85.1 cm、檜材、一木造。彫眼、白毫は水晶。左手に宝珠を持つように掌を上に向け、右手に錫杖を持つ。几帳を少し広げ、拝みやすくしたが上部に組み紐があり、尊顔の上部が見にくかった。最後に内陣にも入れていただき、真下から本尊の阿弥陀如来坐像を拝むことが出来た。平安時代末期の定朝様、像高 85.7 cm、檜の寄木造、胎内に内刳りを施し、眼は彫眼、来迎印を結び、結跏趺坐(ケツガサ)する。全身に漆を塗った上に、金箔を施している。今まで多くの寺を訪れたがこのような歓待は初めてであった。住職に礼を言い、待たせてあったタクシーに乗り、高田本山専修寺(センシュジ)に向かった。

## 一身田寺内町散策

唐門（重文）の前でタクシーを降り、全員揃うのを待った。門は切妻造、檜皮葺、前後軒唐破風付四脚門で1844年建立、如来堂の正面に位置する。菊の御紋があり、かつては勅使門で明治天皇も通られたそうだ。随所に素晴らしい彫刻がみられる。全員が揃ったので歩き始めた。厚源寺は専修寺が出来る以前からあった寺で鎌倉時代の聖徳太子立像（県指定）がある。寺の都合が悪く拝観が出来ず、庭にある聖徳太子の石像だけを拝んだ。慈智院には1639年建立、寄棟造、本瓦葺の本堂（県指定）があり、見学した。一身田寺内町の館に入り、寺内町の説明を聞き、ビデオを見て少憩した。再び寺内町の散策を始めた。一御田(イチミダ)神社（市指定）には1592年の棟札に「寺内」という呼び方がみられ、その頃には寺内町が成立していたと考えられる。

環濠に沿って南に歩くと南の堀とされる毛無川に出会う。近くに東の門であった「黒門」跡がある。朝夕の6時に門は閉じられたそうだ。西に歩くと旧村境の表示がある。この地より西の土地を2代藩主藤堂高次が寄進したことにより、境内が広がったことを示している。山門前の参道を進むと境内の境を示す石橋と釘抜門（共に市指定）がある。門は扉がなく、両側の親柱に貫を通しただけの簡素なものだ。山門（重文）は入母屋造、本瓦葺、五間三戸の二重門 詰組斗拱の禅宗様と通肘木（トウビジキ）の大仏様が併用されている。1704年建立、背面側の間口三間を張出し御影（ミヱ）堂の正面に建っている。門をくぐり、境内を歩き、太鼓門（重文）から外へ出て昼食場所に向かった。この門は入母屋造、本瓦葺で長屋門の上に櫓を載せているような建物だ。

## 昼食 栄屋

蟹が自慢の料亭で「華ごぜん」をいただいた。刺身の中に蟹もあり、美味しい。昨日とうって変わって非常に寒く、ビールを飲む人はいない。お爛した酒を飲み、楽しい食事であった。

## 専修寺 真宗高田派本山

再び太鼓門から境内に入り、茶所（重文）の中の進納所で受付を済ませた。この建物は入母屋造、本瓦葺、唐破風付だ。如来堂（国宝）に入ると大きな涅槃図が架けてあり、絵解きをしてもらった。今まで下り藤と思っていた寺紋は柳と菩提樹が繁茂したという創設時の伝承により、柳の葉と菩提樹の葉を垂れ下げたものだと知った。その後絵解きをした寺僧が案内してくれた。まず本尊阿弥陀如来立像（重文）を拝んだ。この像は像高80.5cm、寄木造、快慶のアン阿弥様の三尺阿弥陀だ。本願寺派は延暦寺と対立していたが高田派は友好を保ち、その証として1465年真慧（シメ）上人がこの像を比叡山延暦寺から譲り受けたそうだ。お堂は1748年建立、入母屋造、本瓦葺、向拝三間、軒唐破風、裳階（モツ）付、真宗寺院には珍しい禅宗様の仏殿形式の建物だ。御影堂の高さと合わせる為に裳階を付け、勾配をきつくして棟を高く上げ大きくしている。南向きに建っているのが珍しい。妻飾りの鶴がきれいだ。僧の案内で通天橋（重文）を通り、御影（ミヱ）堂（国宝）に行った。橋は1800年建立、唐破風造、本瓦葺で如来堂と御影堂をつなぐ吹き放ちの廊下となっている。御影堂は1679年建立、入母屋造、本瓦葺、和様、正面向拝3間付で専修寺の中心伽藍で真宗開祖親鸞の坐像を正面中央の須弥壇上に安置する。巨大な建物で内部は内々陣、余間、内陣、外陣等からなる。格天井の装飾、欄間彫刻、墓股、虹梁絵様など江戸時代初期の手法をよく示している。説明を聞いた後宝物館に行き、三帖和讃 親鸞筆（国宝）、西方指南抄 親鸞筆 附 直門弟書写本（国宝）、親鸞聖人像（県指定）、十字名号等を見学した。僧の案内が終わり、境内の西側にある御廟唐門（重文）と御廟拝堂（重文）を見た。寒さと風が厳しくなり、見学を止め、一身田駅に向かった。

津駅で降り、ホテルで荷物を受け取り解散となった。

## 津の感想

現在は伊勢神宮に人は集まるが津は寂しくなっている。タクシーの運転手は立派な仏像のある歴史ある寺の所在はおろか名さえ知らない。ひつまぶし、天むす、味噌カツなどの発祥が津にもかかわらず宣伝上手な名古屋の名物となっている。目立つことの嫌いな津の人の気質のようだ。これは藤堂高虎がナンバー2に徹して目立たないようにしたことが原因かなと思った。